

「原爆先生の特別授業」の趣旨

状 況

特定非営利活動法人原爆先生(以下「私共」という)は、ヒロシマの被爆物語と原子爆弾の解説を児童や生徒(以下「受講者」という)に話す活動として、2008年から「原爆先生の特別授業」(以下「特別授業」という)を実施しています。

特別授業は、学校が外部から講師を招聘して行なう正規授業で、小学校は東京都内を対象とし、中高校は全国を対象としています。

いずれの学校でも2校時を使用し、小学校は前半45分、5分の休憩をはさみ後半45分の90分、中高校は110分で実施します。

受講者の感想は単一的なものではなく、受講者個々が自分なりに考えた結果は、単に原爆や戦争だけに留まらず、いじめや暴力、医療や科学への興味など多岐にわたります。



特別授業の実績

特別授業は、2022年3月までに 1,700校で実施し、受講者の総数は 15万人となっています。

年度別特別授業実施数										累計: 1,703 校
~2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
76	74	108	129	178	182	215	223	230	115	173

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大により実施校が大幅に減少しました。

実施日の年間固定化

2015年度から都内小学校での年間固定化をすすめ、現在までに133校が固定化されています。固定化とは、特別授業実施日を、毎年X月、第X回目のX曜日、XX:XX時～、で固定化し、当該校との間で半永久的な実施を約束することです。

実績の詳細と分析表

実施校数と正味実施校数を地区別に集計した表、毎年度の実施校一覧表、レポート校集計表、固定校一覧表などの諸表を [こちら](#) でご覧いただけます。

* 参考

実施校・・・のべの実施校数であり、同一校が2回実施すれば2校でカウント

正味実施校・・・正味の実施校数であり、同一校が複数回実施しても1校でカウントされる

特別授業の内容

特別授業の内容は以下の2点に大別されます。

1. ヒロシマの被爆物語(45分) * 中高校は50分

当時17歳の少年兵(主人公)の手記を元に、主人公が被爆直後のヒロシマ爆心地に人類として初めて足を踏み入れ、そこで遭遇した様々な出来事を物語として話します。

受講者は主人公の目線に立って原爆の恐怖と惨状を知ります。物語からは主義主張を徹底的に排除し、主人公の目線による客観的な事実の伝達に徹しています。

また、受講者の想像の障害となる写真や動画の使用を極力省きました。

受講者は原爆の惨状等を主人公の目線で体感し、原爆・戦争・いのちなどを受講者自身で深く考えます。



2. 原子爆弾の科学的解説(45分) * 中高校は50分

広島が原爆投下目標地に決定された経緯や、原爆を投下したエノラ・ゲイの軌跡、原爆の具体的な威力と被爆地の状況などを科学的に解説します。受講者は原爆に対して酷い・怖いという感情だけでなく、論理的・理性的に原爆を体験します。

タイトルの「7000℃の少年」は、太陽を凌ぐ7000度もの高温を発生させた原子爆弾のコードネーム「リトルボーイ(少年)」と、灼熱の爆心地で奮闘する少年兵の双方を表しています。

特別授業は目的がない

特別授業は、反戦や反核を唱えるものではありません。また、平和教育が目的でもありません。

特別授業には目的がありません。



特別授業では、受講者にヒロシマの被爆事実と原子爆弾の威力や開発歴史などを話します。受講者は事実を知ることによって様々なことを考えます。

考えた結果として意見が生まれます。その意見は百人百様のものであり、受講者の成長や知識の習得度合いによってたえず変化します。他者は、それらの意見に賛否は言っても正誤の判定はできません。また、軽重を付けることもできません。特別授業のテーマである原爆や戦争は「1+1=2」というように「答えがひとつのテーマ」ではなく、人それぞれに答えがある「無限に答えがあるテーマ」です。このようなテーマでは、答えや意見が大切ではなく、受講者自身で考える、という行為そのものが重要です。

特別授業は、受講者が自身で考えるための有効な材料を提供することです。決してひとつの答えを導き出すために行うものではありません。

特別授業は、先生方が子供たちに原爆を指導するための予備教材となります。ゆえに、先生方それぞれの指導目的に適合できるよう、特別授業そのものからあらゆる目的を取り除きました。

ノンフィクション小説「ヒロシマの九日間」

特別授業は、当NPOの代表・池田眞徳(以下「代表」という)が2006年に出版した小説「ヒロシマの九日間」から抜粋しています。この小説は代表の父・池田義三(以下「義三」1927-2009)の原爆体験を題材にしたものです。

義三は、昭和19年(1944年)に17歳で陸軍船舶兵特別幹部候補生として入隊し、広島県の江田島に配属されていました。

昭和20年8月6日早朝、軍需物資調達の命令を受けた義三は、8名の戦友たちと共に広島市内に入り、爆心から3キロ地点の宇品西二丁目で被爆しました。

義三は、その後に発せられた命令で広島市内の消火作業と被爆者たちの救助活動を行ない、翌8月7日に人類として初めて爆心地に踏み入り、死体の捜索・収容そして焼却作業に九日間従事します。



小説「ヒロシマの九日間」は、少年兵士義三がヒロシマの過酷な惨状のなかで勇気を振り絞って活躍した物語です。この小説「ヒロシマの九日間」は、残念ながらもすでに絶版となっています。

「伝える」が目的なのか？ 「伝わる」が目的なのか？

テレビや新聞などで「伝える、語り継ぐ」という言葉が頻繁に使用されています。学校では子供たちまでもが「伝える・語り継ぐ」という言葉を当たり前のように使っています。しかし、何を伝えるのか？ どのように伝えるのか？ 伝えた結果はどうなるのか？ これらPDCAを明確に示すものは殆どありません。

素晴らしい映画を観た人は、自身が感動し、周りの人々に自分の感動を率直に話します。それを聞いた人は感動を自然に受け入れ、自分でも映画を観ようと思えます。これが「伝わる」ということです。ロコミの原点はここにあります。

逆に「伝える」行為には伝える人の主観が入ります。時には主義主張も加わります。伝えられる人にとっては迷惑千万なことであり、度が過ぎると反発を生むこととなります。だから「伝える」という行為で「伝わる」という結果を生むことは困難です。

特別授業では、ヒロシマを伝える、というような継承意識はありません。また、ヒロシマや原爆を理解してほしい、というような目的もありません。他人の話を聴くだけで理解できる、こんなマジックなど無いからです。

では何が必要なのか？ それは、受講者がヒロシマや原爆に興味を持つことです。興味を持てば自分自身で調べ勉強します。自身で勉強して初めて理解できることになり、結果的に「伝わる」が実現されます。これは原爆や戦争というテーマに限ったものではなく、国語や算数、社会や理科をはじめあらゆる教科に共通します。

受講者に興味を持たせることが特別授業の趣旨です。だからこそ、特別授業は受講者がヒロシマや原爆に興味を抱く内容にしなければなりません。前述したヒロシマ物語や原子爆弾の解説、さらには講師の話法のかなかに、受講者の興味を喚起させるための様々な工夫を講じています。

風化はなぜ起こる？

人々は「聞きたい話」には高いお金を支払います。聞きたい話は人から人に自然に伝わります。知らない人は早く聞きたいと思います。だから益々広がります。「クチコミ」はここから生まれます。

反対に聞きたくない話は「お金をもらっても聞くのは嫌だ」と言います。「聞きたくない話」であるがゆえに人々は聞くことを避け、ますます敬遠することになります。そこに風化が生まれます。



戦後70年を経過してヒロシマ・ナガサキが日々風化しつつあるのはなぜか？

「嫌な話は聞きたくない！」 この言葉がすべてを表しています。

では逆に、ヒロシマ・ナガサキを人々が永遠に忘れ去らない方法は何か？ それは、ヒロシマ・ナガサキを「もっと知りたい、行きたい」にすることです。「もっと知りたい、行きたい」は興味から生まれます。興味は人々の欲望を駆り立て、さらなる興味を引き出します。「日本人にとって大切な出来事だから後世に伝える」という特定の思いや個人の主張が強くなれば、それは受講者に対する押し付けとなり、押し付けが受講者を遠ざけます。つまり、伝えるという行為がさらに風化を増長させる、という逆効果が懸念されます。

風化は「嫌^{いや}！」から生まれます。「もっと知りたい」という欲望から風化は生まれません。

物語と科学的解説が興味を育む

原爆先生の特別授業は、17歳の少年兵士達が、被爆直後の悲惨極まる爆心地で、勇気を振り絞り数々の試練を乗り越えて活躍をする、そのような事実に基づく物語です。

物語の中に様々な科学的事実を組み込み、受講者が面白いと感じる内容に仕上げました。面白さが受講者の興味を引き出します。これらの興味は、さらなる興味を生み出します。これが「伝わる」の原点です。

また、私共は講師の話法も体系化しました。

講師は、用意された脚本に沿って話します。脚本には講師に対する注意点や立ち居地などの細かい事項を入念に記載し、講師に厳守するよう求めています。講師は受講者に教育を行う者ではなく、受講者に興味を導くエンターテインメントでなければなりません。



特別授業では酷い写真や動画を使用しません。写真や動画、講師の感情表現などは受講者の体感を著しく妨げます。講師の話法が受講者の頭に鮮明な状況を描かせ、これでもか、という臨場感をつくります。このような話法の仕掛けが脚本に存在します。

大半の受講者から「あのように淡々と話されているのに悲惨な情景が恐ろしいほど頭の中に描くことができた」というお言葉を頂戴しています。また、聞くに耐えない恐ろしい話が多くあるが、次に何が起こるのか？ たえず興味が沸いてきて自然と話に引き込まれてしまった、というお言葉も数多く頂戴しています。

原爆先生

前述しましたように、原爆の威力や構造そして核分裂や核融合などの科学的な説明を特別授業のなかに積極的に取り入れています。それら科学的な事象の解説は、受講者が様々なことを判断する上で必要不可欠であるからです。

当NPOは、それら科学的な知識を専門研究所の研究者から正確かつ最新の知識を得ることにしています。受講者に話す内容に間違いがあってはなりません。



このことから、私共の名称は原爆の被害や威力および関連事項を受講者に話す「原爆先生」と命名しました。

原爆先生の現状と将来

特別授業の実績は年々増加し、2022年3月までにのべ1,700校で実施し、これらの学校から良好な評価を得るに至っています。2015年度から首都圏・東海地区・近畿地区の中学校・高校で「修学旅行事前授業」を開始し、これまで約200校で実施しました。

私共がテーマとする原爆、戦争、平和をはじめ、地震や風水害等の災害、さらに昨今大きな社会問題となっている、いじめ、ひきこもり、不登校、無差別殺人等々、これらはすべて答えが無限にあるテーマです。私共はこれを「ヒューマンテーマ」と称しています。

全国の教育界ではこれらヒューマンテーマの教育方法が検討されていますが、その手掛かりとなるのが能動的学習(アクティブラーニング)です。特別授業は「能動的学習の材料提供」という位置付けです。決して子供たちに教育を行う授業ではありません。原爆先生が提供する材料によって子供たちに能動的学習を指導するのは学校の先生方です。だからこそ、提供する材料は子供たちが興味を抱くものでなければなりません。

よしぞうロード

私共が特別授業で話す物語の主人公・池田義三は、昭和20年8月6日、軍の命令を受けて市内の消火作業と被爆者の救援のために江田島の幸ノ浦基地から広島市内に向かいました。そして義三は、ヒロシマの様々な地で戦友たちと共に奮闘しました。これら、義三たちが活躍した地名を表したマップが「よしぞうロード」です。

修学旅行で広島を訪れた生徒たちが、また特別授業を受講した受講者や保護者の皆さんが、さらには義三たちの活躍に感動した世界中の人々が地図を片手によしぞうロードを巡り、そして様々な地で想いにふける聖地巡礼の姿。

私共はそんな姿を想像し、一日も早く実現されることを心から願っています。

2022. 03. 20

特定非営利活動法人原爆先生

池田真徳

ikeda@hiroshima9.com

090-3332-8932

<http://www.hiroshima9.com/>



[拡大](#)

2011年8月5日初版
2012年7月12日改
2012年8月7日改
2012年8月13日改
2012年10月17日改
2013年2月21日改
2013年5月15日改
2013年6月18日改
2014年4月22日改
2014年7月15日改
2014年7月21日改
2014年7月22日改
2015年6月11日改
2015年7月25日改
2016年4月22日改
2017年3月20日改
2017年8月31日改
2017年9月10日改
2017年10月25日改
2018年3月5日改
2018年6月5日改
2019年8月5日改
2019年8月23日改
2020年10月5日改
2020年10月25日改
2021年3月25日改
2022年3月20日改